

武蔵野日曜集会

ナルドの香油

――ヨハネ伝第12章1～11節――

1968年3月3日

小池辰雄

ラザロの姉妹マリヤ 過越の祭 マルタは仕え ナルドの香油 壺をこぼちて 罪ある女 償
い方なき者 油注がれたる者 福音する 葬りの油 キリストの聖霊 キリストの香油

【ヨハネ12・1～11】

1 過越^{すけし}の祭の六日前に、イエス、ベタニヤに來り給う、ここは死人の中より甦^{よみがえ}えらせ給いしラザロの居る處なり。2 此處にてイエスのために饗宴^{ふるまい}を設け、マルタは事^{つか}え、ラザロはイエスと共に席に著^つける者の中にあり。3 マリヤは価高き混りなきナルドの香油^{にかのけ}一斤を持ち來りて、イエスの御足にぬり、己が頭髮^{かみのけ}にて御足を拭いしに、香油のかおり家に満ちたり。4 御弟子の一人にてイエスを売らんとするイスカリオテのユダ言う、5 『何ぞこの香油を三百デナリに売りて貧しき者に施さざる』6 かく云えるは貧しき者を思う故にあらず、おのれ盗人にして財囊^{かねいれ}を預り、その中に納むる物を掠^{かす}めいたればなり。7 イエス言い給う『この女の為すに任せよ、我が葬りの日のために之を貯^{たくわ}えたるなり。8 貧しき者は常に汝らと偕に居れども、私は常に居らぬなり』9 ユダヤの多くの民ども、イエスの此處に居給うことを知りて來る、これはイエスの為のみにあらず、死人の中より甦^{よみがえ}えらせ給いしラザロを見んとてなり。10 斯て祭司長ら、ラザロをも殺さんと議る。11 彼のために多くのユダヤ人さり往きてイエスを信ぜし故なり。

●ラザロの姉妹マリヤ

この類似ないし並行記事というものは、四つの福音書に出ておりまして、マタイ伝でいますと26章9節から13節、マルコ伝は14章3節から9節、ルカ伝は7章36節から39節になつています。マルコ伝はこの四つの福音書のうちで土台となる福音書でありますが、マルコ伝とマタイ伝は記事がかなり並行しているわけです。ルカ伝とはまたちがう。ところが今度は、ルカ伝とヨハネ伝がある意味において似たところがある。けれども、これも違う。場所と時間からいうと、マタイ、マルコ、ヨハネが過越の祭の前時、ベタニヤでありまして、あい呼応しているが、ルカ伝の方はガリラヤ湖畔の出来事で、もっと伝道の前の方であつて、



これと違う。

というわけで、そのことの詳しい解説は、私はかつて『曠野の愛』27号（1957年春季号「ナルドの香油」）に書きましたので、どうぞお読みになってください。27号ではマルコ伝のところを中心にして書いたわけですが。今日はヨハネ伝の方で、少し違うわけです。けれども、この四つは渾然として、これを読むときに、なんともいえない味を持ったものになってくるので、今日も別にバラバラにして読みたいとは思っていないのです。

ヨハネ伝でははっきり、ベタニヤであって、しかも兄弟ラザロ——これはその前の11章の始めに、

「^{こゝ}爰に病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。」

とあって、マルタ、マリヤ、ラザロは兄弟姉妹であって、しかもこのラザロが死んでから四日目にキリストがこれを甦らせたという驚くべきことが書いてある。そのすぐ後ですから、なんといつてもこの記事は、歴史的にみてずつと繋がっているとみるよりか仕方がない。確かなものでしょう。

香油の事態は、マリヤという女性がやったことにはっきりここになっているわけです。ところが、マタイ、マルコでは、

「ある女」

と書いてある。名前が伏せてあるわけです。筆者が知っていたか知っていなかったは分かりませんが。ルカ伝では、

「罪ある一人の女」

と、特に「罪ある」という言葉がそこに更にのっている。そして、ルカ伝の「罪ある女」という7章の記事にこの8章に「マグダラ・マリヤ」という言葉が出てくる。そこで、この「罪ある女」があるいは「マグダラのマリヤ」であるかもしれない。というのは、「マグダラ」というのはやはりガリラヤ湖畔の寒村でありまして、地理的にいつてもやはりルカ伝の方は7章、8章が続いている。また、ヨハネ伝8章の1節から11節のところに、

「姦淫の時に捕らえられた女」

という言葉がある。これが実はヨハネ伝8章のこの記事はルカ伝21章の終りに行くべきものであるということとを学者が言っているわけです。これはもう大体、定説になっていますけれども。このルカ伝21章のがヨハネ伝のこの中へ飛び込んでしまったと。ルカ伝21章はどういうところかというところ、これがちょうど過越の祝いの前になって、22章になると、

「さて、過越という除酵祭近づけり」

と書いてある。ですから、ヨハネ伝8章のこの記事の女性というものが、マタイ、マルコで

「ある女」



といわれているのと、あるいは同じ女性であるかなんか分からない。だいたいそういうことも想像できるという可能性を持っているわけです。まあその女性についてはそういうようなことです。しかし、ヨハネ伝でいうところの

「マリヤ」

というのは、その「ある女」とか

「罪ある女」

とかいうのと等しいかということになると、これはだいたい問題になるわけで、そこで困るわけですけども。辻褄を合わせようとしても、そこに無理がある。まあそういうような大体、見当付けの前提をしておきます。

●過越の祭

マルコ伝によると、エルサレムにキリストが入城されてから4日目に即ち、ニサンの月の13日というとき。この「除酵祭」のことは旧約をみないといけません、出エジプト記12章に、

「エホバ、エジプトの国にてモーセとアロンに告げていたまいけるは、
²此月を

「アビブ」は「ニサン」のことで、3、4月です。シーザーが作ったローマの暦も3月から数えている。だから、12月が「デッセンバー」でしょ。「デッセンバー」の言葉の意味は本当は「10月」ということです。ずれてしまっている。

汝らの月の首^{はじめ}となせ、汝らは年の正月となすべし。³汝等イスラエルの全会衆に告げて言うべし。此月の十日に家の父たる者おのおの^{こひつじ}羔羊を取るべし、即ち家ごとに一個の^{ひとつ}羔羊を取るべし。⁴もし家族少くして其^{こひつじ}羔羊を尽すことあたわずばその家の隣なる人とともに人の数にしたがいて之を取るべし。各人の食う所にしたがいて汝等^{こひつじ}羔羊を計るべし。⁵汝ら^{こひつじ}羔羊は^{きず}疵なき^{とうさい}当歳の^{おす}牡なるべし。汝等綿羊あるいは山羊の中よりこれを取るべし。⁶而して此月の十四日まで之を守りおきイスラエルの会衆みな^{ゆうぐれ}薄暮に之を屠り、⁷その血をとりて其之を食う家の^{ふたつ}両旁の柱と鴨居に塗るべし。⁸而して此夜その肉を火に焼て食ひ又^{にがな}酔いれぬパンに^{にがな}苦菜をそえて食うべし。云々。

とありまして、それが「過越」であるということが11節に書いてある。

11なんじらかく此を食うべし即ち腰をひきからげ足に靴を穿^はき手に杖をとりて急ぎて之を食うべし、これエホバの^{すびこし}逾越節なり。¹²是夜われエジプトの国を巡りて人と畜^{けもの}とを論^{いわ}ずエジプトの国の中の^{ういじ}長子たる者を^{こいし}尽く^{うち}撃殺し又エジプトの^{もつもの}諸の神に罰をこうむらせん。我はエホバなり。

エジプトでもって苦しみを受けたところのイスラエルの民のためのエジプトに対するエホ



バの神の復讐の行為である。前に殺されましたから、それに対する「命には命を」というのがイスラエルのあれですからね。

13 その血なんじらが居るところの家にありて汝等のために記号^{しるし}とならん。我血を見る時なんじらを逾越^{すぎこ}すべし。又わがエジプトの国を撃つ時、災なんじらに降りて滅ぼすことなるべし。14 汝らは日を記念^{おぼ}えてエホバの節期^{いはいび}とし世々これを祝うべし、汝等之を常例となして祝うべし。15 七日の間^{たね}酔いれぬパンを食うべし。その首の日にパン酔^{はしめ}を汝等の家より除け。凡て首の日より七日までに酔入たるパンを食う人はイスラエルより絶^たるべきなり。」(出エジプト12・1～15)

それからこの「過越」が贖罪のことになっていくわけです、罪の贖いということに。始めは復讐観念があつたんですが、それから、人の罪を傷なき当歳の小羊を屠ることによつてその罪を、その羊にみなかぶらせて、そしてこれを屠ることによつて罪が赦されると――罪の価は死ですから。その罪を担うものは罪なきものでなければならぬ――それをひとつの当歳の傷なき小羊ということに象徴してやったわけで、これが旧約聖書の贖罪の宗教であるという。

それをキリスト自身が即ち罪なきひとですから、これが罪ある者の罪を着てしまつて、そこで贖うということがこの十字架の贖いということに、彼自身が小羊となり彼自身が大祭司となつて、キリストが旧約の宗教を完全にアウフヘーベンした。満たしてそしてそれをもう必要なきものとした、というのがこの過越の祝いの意味であります。

その過越の祝いの前という。これは14日から始めてそれから1週間、21日まで7日半と続くようなお祭なんです。その過越の祝いの1週間のうちにキリストが贖罪の死を遂げてしまうわけですが。

●マルタは仕え

このところでは、

1 過越^{すぎこ}の祭の六日前に、イエス、ベタニヤに來り給う、ここは死人の中より甦^{すぎこ}えらせ給いしラザロの居る處なり。

「ベタニヤ」というのはエルサレムの東南にあたる。エルサレムのすぐ近くです。ここにはマルタ、マリヤの家にはちよいちよ泊まりに來られたわけです。そのラザロを甦らせたので、非常にこのマルタもマリヤも感謝して、キリストにおもてなしをしようと思つたのが、この「饗宴を設け」ということになるわけです。ところがまた、そういった死人を甦らせたというので、非常な好奇心とまた非常に新しくキリストを信ずる連中がワツシヨイワツシヨイと押しかけてきた。そのことが9節の、

「ユダヤの多くの民ども、イエスの此處に居給うことを知りて」



と、イエスためばかりでなく、甦ったラザロがどんな顔しているかというわけで見て来たわけです。そういう背景のもとにこのところを読んでいかなければならぬ。

² 此処にてイエスのために饗宴を設け、マルタは事え、

この「マルタは仕え」という言葉を読むとすぐ思い出すのは、ルカ伝10章38節の、

「³⁸かくて彼ら進みゆく間に、イエス或村に入り給えば、

「ある村」というのはおそらくこのベタニヤです。ルカ伝9章51節からあとはキリストが北から南に向かって、エルサレムへ向かつての旅のことが出ていくわけですから。ずっとルカ伝は9章から21章まで。

マルタと名づくる女おのが家に迎え入る。³⁹その姉妹にマリヤという者ありて、イエスの足下に坐し、御言を聴きおりしが、⁴⁰マルタ饗応のこと

ここにも「饗応」と書いてあるね。

多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言う『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思い給わぬか、彼に命じて我を助けしめ給え』

⁴¹主、答えて言い給う『マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により、思い煩いて心勞す。⁴²されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪うべからざるものなり』(ルカ10・38)

マリヤはキリストの言葉を一生懸命で全身をもつて聴いていた。マルタの方はおもてなしをしようと一生懸命にやっていた。けれどもマルタは、

「マリヤが何もしないでけしからん、ということはどうぞ仰ってください」

なんてことをキリストに言ったわけだ。そんなことを言わないで、マルタは自分でもって一生懸命に働いていればそれでよかったものをね。マルタは気持が分裂したところがいいないわけです。何も聴いていることがいつもいいわけではないけれども。分裂なく働くことと、それから分裂なく聴くことは同じことです。だから、よきマルタよきマリヤというものは、一人のひとが両方を兼ねていなくてはいかん。あるときは、誰がしなくても自分でやるというように働くであらうし、あるときは、何もかも捨てて聴くであらうし。そういうことが自在にならなくてはいかんですね。

「あの人はマルタ型である。あの人はマリヤ型である」

なんて、人を決め込んだり、また自分がそう自分を決めてみたり、そんなことをすることはどっちも間違いです。

真理というものは、静と動と両方があるんです。静だけでもダメだし、静かなことだけでもダメだし、それから、動いていることだけでもダメです。人間というものは、晩になれば静かに眠るでしょうし、また昼間は働くでしょう。これも静動の常に交代を我々の生活そのものがやっている。



「夜あり昼あり、これ初めの日なり」

なんて書いてある。呼吸も、吸うことと吐くことと両方なければ呼吸ということは成り立たない。みなその両極性を持っている。これはゲーテさんが言っている言葉と同じことですが。「ポラリテート」という。両極を持って、そしてそれがいつも第三のものをもってそれが統合されて進んでいく。そういうことです。

今、あなた方は全身をもつてこの福音を聴くわけです。耳で聞いているのではない。ただ心で聞いているのでも、頭で聞いているのでもない。全身をもつて聴くということは実は、聞いていることがもの凄い動でもあるわけです。だから私は、

「この聖書はドラマだから、ドラマの中に自分を投げ込む心をもってこれに立ち向かっていなければ」

と言う。私が語るときも、まさにドラマの中に自分を入れて語っていなければ、私は上の空になってしまう。そこで、

「聴くも語るも同じことである」

と申し上げるわけです。同じ現実の中に一緒に入っていこうということです。お説教でも何でもありません。

●ナルドの香油

そういうことで、「マルタは仕え」というのは、この場合もマルタはまた仕えていた。

ラザロはイエスと共に席に著ける者の中にあり。

一緒にそのご馳走を食べようというわけだ。マリヤはどうしたかということ、今度は聞いているのではなくて、彼女は、

³マリヤは^{におい}価高き^{におい}混りなきナルドの香油一斤を持ち来りて、イエスの御足にぬり、己が^{かみのけ}頭髮にて御足を拭いしに、香油のかおり家に満ちたり。

と。「ナルドの香油」というものがどういうものか。

聖書の植物を研究した本があつて、それによると――「ナルド」という言葉は旧約聖書に出てくるんだが、知っているかな。雅歌書に出ている。雅歌書1章12節に、

「王その席につきたもう時、わがナルダその^{かおり}香味をいだせり。」(雅歌1・12)

とある。「わがナルダ」と、乙女が持っていたナルダがあつたんです。ヘブライ語では「ネルドス」という。ギリシア語では「ナルド」。また4章13節にある。要するに雅歌書に出てくる。その原産地はヒマラヤ山の南面ネパール地方に一番多くあるそうです。海拔3600から5700というから随分高いです。富士山より上だ。そういうもの凄い高山植物です。高い所にあるナルドほど香りがいいそうです。岩石の中に育つ、そして吸うものは大気中の清浄な露だけでしょ。それが素晴らしい香りを持つというのだから不思議なものですよ。オミナエシ科に属する。東洋にしかない。中央ヒマラヤと東部ヒマラヤの非常に高度な山岳地帯



にあるそうです。シナの文献をみると「甘松香」といい、梵語で「ナラダー」という。根と実に香りがあるそうです。根の茎の揮発性の成分は $C_{15}H_{24}$ という分子構造だという。一斤の値段が300デナリと書いてある。デナリはローマの貨幣の単位で、1デナリがちょうど一日の労働者の賃金に当たるので、300日の労金にあたるから、5分の3年位の生活費に値する。そういう非常に高価なものなんです。

●壺をこぼちて

それを、

イエスの御足にぬり、

と書いてある。マタイ、マルコの場合には、ベタニヤのその

「ある女が石膏の壺を持ってきて、それをイエスの頭かしらに注げり」

と書いてある。「石膏」のことを「アラバストロン」という。そいつをしかもうち破って塗ったんです。マタイ、マルコでは、

「癩病人シモンの家」

と書いてある。しかし、香油を自分の尊敬する人の頭に塗ったり、足に塗るということは、ある意味において習慣的にあったんだそうです。だから、ただ一回のことと解さなくたっていいわけです。それぞれの記事はみなそれぞれの女性がやったとみたって、それはそれでもいい。なにも一人のひとと考えなくたっていい。けれども、時間的に場所的にかなり似ているから、どうしたんだろうかなと、学者は一生懸命で頭をひねるわけです。

マルコ伝に特に

「その壺をこぼちて」

と書いてある。「壺をこぼちて」とあるところがこのマルコ伝の非常に強い記事なのであって、マタイ伝には「こぼちて」という言葉はない。他の記事にもない。マルコ伝だけ「こぼちて」と特に書いてある。そこで、マタイ、マルコ、ルカ伝がもし同じような女性であったとするならば――ヨハネ伝はちよつとかなり困りますけれども――「こぼちて」と言うならば、前にこぼたないで塗ったことがあったのではないか。そうすると、ルカ伝は時間的にも場所的にも前になりますから、ルカ伝の

「罪ある女」

というのと、マタイ、マルコの

「ある女」

が一つであって、そして、前は

「御足に塗った」

後は

「こぼちて頭に塗った」



となるかというと、だいたい面白いのではないかと。これは私の想像ですが。私はむしろそう読みたいわけです。

● 罪ある女

そして、その「罪ある女」ということで、ちよつとルカ伝の方にいつぺん戻ります。ルカ伝7章のこの「罪ある女」というのが、あるいはマグダラのマリヤであるかもしれない。さんが。要するに、自分が非常になにか前非があつたわけだ。それで申し訳ないと。しかしながら、キリストはそれを赦した。これがルカ伝7章のところをずっと読んでいきますと、パリサイ人の家でしょ。36節、

「36ここに或パリサイ人ともに食せん事をイエスに請いたれば、パリサイ人の家に入りて、席につき給う。37視よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのパリサイ人の家にて食事の席にい給うを知り、香油の入りたる石膏の壺を持ちきたり、38泣きつつ御足近く後にたち、涙にて御足をうるおし、頭の髪にて之を拭い、また御足に接吻して香油を抹れり。39イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちに言う『この人もし預言者ならば、触る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人なるに』」

汚らしい女であるのに、とこう言う。

40イエス答えて言い給う『シモン、我なんじに言うことあり』シモンいう『師よ、言いたまえ』41『或債主に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債せしに、42償いかたなければ、債主この二人を共に免せり。』

五百借りたのも、五十借りたのもどっちも償いえないと。どうしてもそれを返済ができないと。両方とも、しかし、棒引きにして許してくれた。どっちの方がこの貸主を愛することが多いかと。そうしたら、たくさん許された方である、ということの問答がそこに出ている。

されば二人のうち債主を愛すること孰か多き』43シモン答えて言う『われ思うに、多く免された者ならん』イエス言い給う『なんじの判断は当れり』44かくて女の方に振向きてシモンに言い給う『この女を見るか。我なんじの家に入りしに、なんじは我に足の水を与えず、此の女は涙にて我足を濡し、頭髮にて拭えり。45なんじは我に接吻せず、此の女は我が入りし時より、我が足に接吻して止まず。46なんじは我が頭に油を抹らず、此の女は我が足に香油を抹れり。』

私が入ってきたのに、お前は何もしないが、この女はこういうようにしてあつたと。

47この故に我なんじに告ぐ、この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なればなり。赦さるる事の少き者は、その愛する事もまた少し』48遂に



女に言い給う『なんじの罪は赦されたり』⁴⁹ 同席の者ども心の内に『罪をも赦す此の人は誰なるか』と言い出づ。⁵⁰ここにイエス女に言い給う『なんじの信仰なんじを救えり、安らかに往け』

●償い方なき者

実は、私たちはみんなこの「償い方なき者」、罪びとなんです。我々はこの自分の罪をどうにもならない。我々は神さまの前に自分でもって努力精進しようが、どんなに道徳的に立派になろうとしても――それはあるところまではいくでしょう――けれども、それは本質的なはなしではない。このことはもう東西の宗教家がみんな体験して行き詰まって、その行き詰まりから突破したのが、仏教におきましても、キリスト教においても、他の宗教でも、とにかくこの自我という問題です。

罪とは自我に執すること、我執が罪ですから。この行為かの言葉ではない。この我執という、もう世の中のすべての問題を煮詰めれば、みんなここからきている。我執というやつ。みな策略を用いたり、人を陥れたり、自分の欲のために何のかんのと、やっているみんな。これが社会の人間関係、社会におけるまた国際関係の煮詰めた問題は全部、人間の心の問題に帰する。

万人は宗教的な問題を根底に持たなければ、その解決がなければダメである。しかも、我執ということは魂の、心の問題ですから。魂、心のあるものはすべて、これは宗教的な問題を根本的に担っているものなんです、我々は。だから、

「万人は宗教人なり」

と私ははつきり言う。信仰するとかしないとか、そういうことではない。我々は魂が、心があるということは、これはもうすべての人が宗教的問題を根底に持っているということ。それを、

「まあ宗教だけは」

とやっているから、一番大事な問題をいい加減にしているから、いつまでたつても始まらない。

その「償い方なき者」なんだ、人間というものは。

「ああ、我は悩める人なるかな。この死の体から、この償い方なき我から救ってくれるものは誰か」

と。ローマ書7章のところにパウロがそのことを嘆いている。彼自身が。そして、キリストがそこから棒引きにしてくださいだから、ちょうどここでキリストが言っておられるとおり。

「全部、それがどのような事態であろうとも、過去も現在も未来もお前の我執は全部、もう引き受けてしまったんだ」



と。完全にそこから解放された。自由にされた。罪から自由にされた。しかし、解放された、自由にされたと言ったって、まだそれは一面である。このことにまた、今のプロテスタントが本当に気がついてない面があるわけです。

とにかく、罪から解放されたというのはもの凄い喜びです。私が無教会にいたときはそうなんですよね。贖罪という、キリストの十字架が一切を赦してください。これは本当にありがたい、正直。頭でなくて、私は心でも受けとっていましたよ。けれども、それだけで、どうもまだ何か欠けているわけですよね。ところが、無教会というのは――無教会も教会もそうでしょうけれども――「十字架は罪の贖い」と、こればかりをお題目にしている。そして、気安めになっている。それではまだ本当の世界ではない。その本当の世界は何かということは、こここの今日のところでも出てくるわけです。

●油注がれたる者

今のルカ伝の、罪からそれを棒引きにされて、もう本当にこの女性ありがたいわけで、涙を流して喜んで、自分にはや問われないと。それで、キリストに赦されたから、

「涙にて御足をうるおし、頭の髪にて之を拭い、また御足に接吻して香油を抹れり」

と。これが感謝の徴ですよ。

これがまた、キリストが南に向かって、いよいよエルサレムに向かってきたときにやはりついて来たわけですよ。たくさんの女性がついて来ましたから。そこで今度は、マタイ、マルコのところにきて、今まで持っていた大事な香油を全部、キリストに捧げてしまおう。もう再びこの壺は使わないというのが、この「壺をうち破りて」ということ。これはマルコ伝ですよ。そして、イエスの頭に、キリストの全身に油を注いだ。

「頭に油を注ぐ」ということは――皆さん、すぐ思い出すのは――詩篇23篇です。

「⁵なんじわが仇のまゑに我がために^{えん}筵をもうけ、わが首にあぶらをそそぎた

もう。わが酒杯はあふるるなり。」(詩篇23・5)

と。「頭に油を注ぐ」という。即ち、「油注がれたる者」、これがキリスト者。キリストは油注がれたる者。「油注がれたる者」とは、聖霊を注ぎ入れることの象徴ですから。形式ではダメですよ。油を注ぎながら本当に祈って、聖霊を注ぐことを昔の預言者はやった。パウロたちは洗礼を施しながら本当にキリストの霊を伝えることをやってたんだ、使徒たちは。

ところが、今の教会はただ水の洗礼、悔改めの洗礼で、形式ばかりで何もそこに本当のことが起きない。そこに、そんな形式ではダメだというのが、内村鑑三の「無教会」というのが出てきたわけです。ところが、形式はダメだはいいいけれども、今度は中味がなくてただ「形式のないこと」だけがいいとしていることも間違い。やり方は、洗礼をしたつていいですよ。しかし、それが本ものであれば。



そういう「油注がれた」即ち、聖霊を注がれた者。キリスト者というのは、私たちキリスト者というのは、「油注がれた者」という意味だ。ヘブライ語でいうと「メシヤ」「マーシアッハ」。あなた方はみんなメシヤであり、キリストなんです、言葉の本来の意味で。「者」なんて言わなくなつていい。あなた方は聖霊を受けたら、「クリストス」「メシヤ」なんだ。ただ、イエスだけが特別に「キリスト」という名前になつてしまつたけれども、本来はこれは固有名詞でなく普通名詞なんです。

「イエスだけがキリストだから、私たちはキリストではない」

なんて思つてはいかん。我々もキリストなんです、本当は。でなかったら、キリストは喜ばないんだ、我々自身がみんなキリストにならなかつたら。

この「赦された」ところはまだ「油注がれる」ところまでこないですよ。けれども、この女性が自分の大事な壺をぶち破つて、キリストにナルドの香油を注いだ。これは自分の全存在をぶち破つた、献げたわけです。すべてを献げるこの気持がこの、

「もはや再びこの油は使わない」という、

「心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし力を尽くして主たる汝の神を愛すべし」

という、その全存在をもつてキリストに対する愛の表れをそこに――自分というものを投げ出すということは、「自分という壺」なんだよね、要するに――壺において象徴されたところの、ナルドの香油において象徴されたところの我そのものをぶち破つて献げている。それが本当の愛ですね。

だから、マタイ、マルコではあそこで、

「この女のしたことは全世界に、福音の宣べ伝えられるかぎり、全世界に伝えられる」

と、キリストが言われた。最高の表現をされたわけです。福音が宣べ伝えられるところに、なぜこの「ナルドの香油」の事態を全世界に伝えるか。その言つた言葉が本当にそうなつてしまつた。

●福音する

ということはどういうことかという、自分自身を完全に投げ出したその姿、これが「福音する」ということなんです。まあ今日初めて私はそういうことを今言うかなんかしらんけれども、自分自身を完全にキリストに、神に、投げ出すという姿が、これが本当に福音するということ。何か口でものを言っているのでも、何かものを書くのでも、何でもない。全存在をぶちまけることが、これが本当の意味において福音すること。

「キリストが福音した」



とはどういうことかというのと、全存在をもつて語り、全存在をもつて行為し、全存在を十字架にかけ、全存在をもつて甦った。これが全部、キリストの福音している姿なんです。そして、彼自身は何と言ったかというのと、

「自分は何もできない。自分は何も言えない。自分は何ものでもない。」

と言った。いつも申し上げているとおり、彼は無者^{むじや}なんです。

「自分は何ものでもない」

と言って、神さまに一切を任して、一切をぶちまけているから、彼は無量者^{むりやうじや}となった。量り知れられない人になった。これが、「福音する」ということ。福音するとは驚くべきことです。しかし、非常に簡単なんです。しかし、この簡単なことが一番難しい。難しいけれども、これは万人に、何か条件を持つてくることではないですから。

「お前はもう少し聖書を読んでから。ギリシア語やヘブライ語ができるようになってから。もう少し人を愛してから。もう少し勉強してから」

だとか、そんなことはひとつもない。そのままいい。今あるがままでいい。現状そのまま、あるがまま、そのまま投げ出せということが、福音することなんだ。

その気合を、このマルコ伝のその

「壺をうち破りて」

という、このひとつの一句にこの女性の全存在の姿を、壺をうち破ると同時に己をうち破っているわけですから。これが本当の人間の根源の氣の道なんです。「気合」という、私は。これが本当の氣の道なんだ。本当の我々の氣というもの。ガイスト、靈道^{れいどう}と言つてもいい。そういった氣の道なんです、これが。我々は本当に氣道を実存していくのが、これが福音するということ。

● 葬りの油

ヨハネ伝のこのマリヤというひとは、なにか素直にすつとキリストに、またキリストに愛されていた女性らしい。何でもいいが、要するにこの場合はマリヤは、

³マリヤは価高き混りなきナルドの香油^{においあかろ}一斤を持ち来りて、イエスの御足に

ぬり、己が頭髮^{かみのけ}にて御足を拭いしに、

そうしたら、

香油のかおり家に満ちたり。

非常に強い香りだものだから、家に満ちた。

⁴御弟子の一人にてイエスを売らんとするイスカリオテのユダ言う、

ところが、それを責めたのが――他の福音書では誰だか分からないんだけど、このヨハネ伝では――「イスカリオテのユダ」と書いてある。ある註解をみると、

「ユダのやつはこのマリヤが好きだったものだから、キリストがマリヤを褒めたり



するものだから、妬^{ねた}んでしまった」

なんて書いてある。あるいはそうかもしれない。

とにかくしかし、妬みというやつは非常に悪い感情です。人間関係を損なうものがこの妬みというやつ。サタンの気持。すぐ羨^{うらや}ましがるということがまた妬みという言葉の兄弟みたいな感情だ。羨ましがるというやつがヘタすると、ちよつと変わると妬みになる。人間の間の事態を、ことに人格関係を比較すると、妬みというやつが比較をしてくる。自我があるところに妬みが必要やつてくる。自我が抜けると、そんなものは抜けてしまう。まあ良寛和尚なんてのは全然妬みなんてものはない人ですよね。何でもうれしくなってしまうて、人のために喜んでいるでしょ。これはもう自我が抜けている姿です。

ところが、旧約聖書を読むと、神さまは、

「我は妬みの神なり」

なんて書いてあるので困ってしまう。神さま自身が妬むではありませんかと。その妬みとこの妬みを一緒にされては困る。「神の妬み」というのはむしろ、

「神の熱愛」

と訳した方がいい。あの「妬み」という訳し方は困りますけれども。しかし、多少そういう逆説的な表現をしているわけですね。サタンのやつが我々の魂を奪う。それに対して神さまはサタンを妬んで、

「妬むほどに慕い給う」

という言葉があるんだよね。それで、自分の方にこれを奪還する。サタンに盗られて地獄に行ったら大変だから。そういう神さまの愛惜です。愛し惜しむ気持が「神の妬み」というもの。そしてこれを元へ戻すわけです。邪道から本道に返すわけです。これが神の救いの本願の心です。

ところが、人間の妬みというやつはそれとはまた違う。自我が立っているんだ、今度は逆に。とにかく、イスカリオテのユダが、そのようなおそらく妬みの感情も混ざっていたに相違ないが、それで自分がえらく、

「貧しき者に施す」

なんてキリストに褒められそうなことを言うわけです。

5『何ぞこの香油を三百デナリに売って貧しき者に施さざる』⁶ かく云えるは貧しき者を思う故にあらず、おのれ盗人にして財囊^{かねいれ}を預り、その中に納むる物を掠^{かす}めいたればなり。

なぜ、そんな無駄なことをするかと。ところが、時と場合が違うんです。

7イエス言い給う『この女の為に任せよ、我が葬りの日のために之を貯^{たくわ}えたるなり。⁸ 貧しき者は常に汝らと偕に居れども、私は常に居らぬなり』

貧しき者はいつでもいるから、またやりたければやりなさい。けれども、私はもうこれ



でお終いだ。私はもうお前たちには逢わない。私はやがて十字架にかかって向こう側に行ってしまう。その私の葬りのためにこの女性は、既に生けるうちに、生ける私に葬りの油を注いでくれたと。

屍しかばねに油を塗ろうと思つて、また女性たちがやつてきたですよ、キリストの所へ。ところが、屍がなかった。けれども、このマリヤはその葬りのことを既に――マリヤとか「ある女」とかいう人は――既にキリストの心を察して、このことをした。弟子たちも、キリストに聞きながら、そのキリストの心がわからない。そういったところに、キリストは本当に、まあ人間としてもうれしかったに相違ない。

「よく、お前は私の氣持をわかつてくれた」というわけです。それで、

「なしうるかぎりをなして、わが体に油を注がしめ、あらかじめ葬りの備えをなせり」

と、マタイ、マルコに書いてある。

●キリストの聖霊

そういうように、ナルドの香油というものは全存在をぶちまけたということ。しかしながら今度は、油というものが持つ意味は、さきほど詩篇23篇にもありましたし、ヨハネ第一書の2章にも出ているわけですが。27節に、

「²⁷なんじらの衷うちには、主より注がれたる油とどまる故に、人の汝らに物を教うる要なし。此の油は汝らに凡ての事を教え、かつ真まことにして虚偽いつわりなし、汝等はその教えしごとく主に居るなり。」(ヨハネ12・27)

「油」と書いてあるのは聖霊のことです。

私たちが自分を、このあるがままの自分をキリストに全托し、投げ出すというと、今度はキリストの方から、この破れ器の中に油が満たされるわけです。

「わが酒杯さかずきは溢るるなり」

という。我という酒杯が今度は溢れるというような言い方と同じで、即ち、油は霊油、霊的な油、聖霊のこと。神の霊、キリストの霊です。

「もうお前は全部、罪から解放された。自由である」

と。それはキリストが十字架をもつて果してくださったところの贖いの恩寵で、それで空っぽになつてしまったから。自分を注ぎ出したら、その中は空っぽになつてしまった。その注ぎ出してキリストの十字架ですっかりそこがきれいにされてしまったところ、空っぽにされたところに入ってくるものは、これがこの聖霊であるわけです。

だから、聖霊が私たちの中に新しい生命の糧となつて、中心となつて入ってきたときに、今度は本当の積極的な自由であるということをはつきり申したいわけです。実力を持った



自由になる。罪からの自由ではなくて、善をなす自由。人を本当に救い上げる、人を助け出すところのそういった力を持った、神の生命、神の光、キリストの光、キリストの愛、キリストの生命――何とでも言えますが――そういったものが自由自在に働くところの自由です。実力を持った自由。罪からの自由でなくて、善への、生命への、生命をもたらし自由です。救いをもたらす自由というものが、この聖霊がなかったら、来ないということ。ここに今の一般のキリスト教界の欠陥があるわけです。

個人の在り方におきましても、何かしらんが、私はいわゆる無教会にいて、十字架からの贖いの自由のときは、まだ本当に生命がなかったですよ、正直。それはある程度の喜びはありました。確かに今までとちがったものがありました。聖霊の働きというものもある程度あつたに相違ない。けれども、聖霊が外から働いて、あることをしているということ、聖霊が中に在って働きますというのとは違うんですよ、質が。

だから、普通のクリスチャンに、

「あなたは聖霊の働きはありません」

とは言えない。それは導かれて、御言によって働いている場合もありますよ。けれども、それはどこまでも外からのことで、ちょうど使徒たちがまだキリストが地上にいたときにキリストの力でもっていろいろ動いたでしょ、正直。病を癒すことまでもやったでしょ。けれども、あれはまだキリストが外から働いて動いているような次第ですよ。ところが、使徒行伝の使徒たちになると、今度は彼らの中にキリストの霊が来てしまっていますから、それで動きだした動きとは、福音書の使徒たちと使徒行伝の使徒たちとはまるで違う。

福音書はキリストの書である。使徒行伝は今度は聖霊の書なんです。そこで、同じペテロがいましても、福音書のペテロはいくらキリストと一緒にご飯を食べたってダメなんだ。使徒行伝のペテロやパウロになると――キリストはいないさそこに、だけれども――キリストは中に入っているんです。御霊として中に入っている。こここの世界が本もののなんです。だから、

「今に私はお前たちに、私のしたこと、言ったことが本当に分かんときが来る

から、待っている」

と。それは中にキリストの霊が入ってくる。ところが、普通のクリスチャンは、

「キリストわれと共に」

と思い込んでいるけれども、思い込んでいたって、それはダメですよ。それはある程度の働きはするさ。けれども、内側から本当にこの自由をもつてするのは、これは御霊を本当にうちに受けてからののはなしです。これが非常に違う。

内村先生もなるほど聖霊において働いた面も大いにあつた方でしょう。けれども、内村先生が本当に聖霊のことを正面切って告白なさらなかったところに無教会の限界がある。そうしてまた、その亜流、エピゴーネンはいわんやダメなんだ。「内村鑑三記念講演会」な



んて3月になるとみんなお歴々がやるけれども、私はそれから抜かされてしまった。この福音のために私は無教会から抜かされたことを光栄と感じている。そんなところに一緒にいたら大変だ。ずいぶん私は悪口みたいなことを言うけれども、私は無教会の出身だから仕方がない。身体が出たんだから。

だから私は、

「使徒たちの使徒的信仰に帰れ」

と言う。キルケゴールの「同時性」ばかりではダメだ、「同質性」にこななければダメだと。この同質の世界に入ったら、もはや天下無敵である。あなた方一人びとりが天下無敵なんです。この御霊を受けたらなんにも恐いことはない。そして、もうつまらない分け隔てはなくなってしまうって、一切を済度していくような、そういうところの霊が入ってきているんだからね。だから、お釈迦さんのものを読んでも、みんな分かりますよ。昔の一流の坊さんは素晴らしいです。だから、私は一流の坊さんのものが好きなんです。お釈迦さんの世界でそういう世界に入っているから、彼らは。

●キリストの香油

そういう、今度はナルドの香油以上のキリストの香油、霊油だ。キリストの芳しき霊。女の方はまあ化粧したっていいけれども、本当の香りは、キリストの霊を受けた女性は本当の香りを持っているんですよ。どんなに世の中に香油なんてものが、お化粧品が出てきたって、それはかなわんですよ、内側からの香りを持っているひとは。内側からの光を持っているひとは。皮膚にいくら塗ったってダメだよな。内側から本当に魂が油されて香りを発するようになくては。だから、パウロがコリント後書2章のところで言ってたでしょ。

「¹⁴感謝すべきかな、神は何時にてもキリストにより、我らを執^{とら}えて凱旋し、何処にても我等によりてキリストを知る知識^{かお}の馨^りをあらわし給う。¹⁵救わるる者にも亡ぶる者にも、我らは神に対してキリストの香^{かう}ばしき馨^{かお}なり。」(コ

リント後2・14、15)

と書いてある。

「我らはキリストの香^{かう}ばしき馨^{かお}なり」

と。あなた方は魂が香りを発していなければ。

西洋菓子でも香料の入っているお菓子はおいしい。やはり香りがある。ただ甘いだけではダメなんだ。食べ物というものは鼻でも食べる。目に見てよろしく、鼻に香ってよろしく、口に味わってよろしいというのが本当の食べ物だ。

「この霊油を全身に浴びよ」

と。ナルドの香油をキリストの頭から注いだこの乙女のごとく、キリストは私たちに霊油



を全身に浴びさせるから。

私たちのなすところはそのような全存在をうち破って、わがうちなる聖霊を注ぎだす。ナルドの香油ならざるキリストの霊油を人々に注ぎ出す。これが聖霊のバプテスマを人に与えることです。聖霊のバプテスマを知らない間に人に与えるようなことになる。聖霊のバプテスマとは、そのようなキリストの香油を人に降り注ぐことの道と自分になることです。それで初めて私たちはこの香油を注いだ出来事の本当の内容を――ただ意味ではない――内容を身につけて、そして福音するとは馥郁^{ふくいく}たる香りを放つこと。福音というものはその馥郁たる香りを、キリストの香りをおのずから分かち与え、部屋中に満たせる、

「ああ、あの人がいるとなんだかしらんが本当に楽しいなあ。天国がそこに展開しているなあ」

というようなことになるわけです。一流の坊さんたちがそうだった。また、代々の本当のキリスト者は、名があるとないにかかわらず、そうである。ここにもはや、そんなことを何百デナリだなんて計算するやつらとはおよそ世界が違うと。だから、キリストが、

「このことは全世界に伝えられる」

と言われたのが決して誇張でも何でもない。このように福音せということであります。ではおしまい。

